言語の謎

ユーン ナディ ボー ウィン

私は言語の勉強が苦手だ。どの言語でもあまり面白いとは思わない。そう考える理由もたくさんある。だが、言語という概念そのものを考えてみると自分が思うより不思議なものだとつくづく感じられる。

私が言語の勉強が苦手な一番の理由を正直に言うと、つまらないからだと言うしかない。私は論理的に考えるタイプで、数学や物理のような理路整然とした科目のほうが面白いと思うのだ。だが言語はそうではない。確かに、文法的な構成やパターンがあるとはいうものの、文法は本当に必要なのかという疑いがある。たとえば、話すことがまだあまりできない子供は自分の要求を文法的に考えることなく、ただ言葉を組み合わせて片言で話す。でも、大人はその子供の要求がわかるのだ。

さらに発音は無作為なものである。どうしてある言葉は綴りどおりの読み方と違ってい

るのと聞かれたら、その言語の母語話者がそう読むからという答えしかないだろう。ある言語学者によると、本当に正しい発音というのはないらしい。数多くの人がそう読むと、その言葉の発音もそうなるからだ。そういう発音が正しいとかこういう発音が正しくないとか言う人は犬に向かって吠え方が間違っていると言うことに似ているということだ。

その上、言語の勉強は一般的に繰り返すものだ。繰り返しはどんなにつまらないことか誰でもわかるだろう。何より私が言語を勉強するとき、いつも恐ろしく感じることがある。それはいくら懸命に学んでいても、いつかこの努力が無駄になってしまう可能性があるということだ。現代でも非常に確実な翻訳の技術が進んでいる。今に、話し手が自分の言語で話して、聞き手が自分がわかる言語でその話を聞き取れるという技術ができたら、言語を学ぶ理由はもうなくなるという恐れだ。未来の人たちはとても運のいい人たちだという

妬ましい気持ちにもなる。

世界中の人々が一つの共通言語だけを使うと世界はもっと便利になるだろうと考えるかもしれないが、私はどうやってもそうはならないと思う。一つの言語でもそれぞれの地方で方言が生まれる。世界中で一つの言語を使って話そうとしても、ある程度時間が経ったら場所やその地域の人々の気質によって違う言語にまた変わると思う。科学的観点から言えば、言語を使う唯一の目的は曖昧さを避けることだ。とは言え、その地域の習慣から人々の性格までが言語に含まれているのが非常に面白い。言語が私たちの認識や信念にどんな影響を与えるのか、それによって私たちが世界をどのように捉えるのかも興味深い。

何より私が奥深いと思う点は考えるときの頭の中の言語である。ある友達に「どの言語で考えますか」と聞かれたことがある。そのとき、何も答えられなかった。自分がどの言語で考えているかさえ気にしたことがなかっ

たのだ。考えてみたら、頭の中で使う言語によって自分の考え方が変わることもあると気づいた。話す時も同じことが起こる。話している言語によって性格が変わってくるように感じられる。特に二か国語以上話せる人たちにこの現象が起こりやすい。自分の体験だと、日本語で話しているときは大人しく見えて、英語で話すときはよくしゃべるタイプに変わると言われたことがある。不思議なことに人間の思考と言語は密接に結びついているのだ。

それぞれの言語にはほかの言語で直接対応することができない単語や概念がある。そしてその国や地域に住んでいる人々の独特な考え方と価値観が反映されている。その考え方と価値観が言語によって次世代に伝えられる。そこから伝統が生まれる。言語はどの視点から見ても文明の核心である。もし言語が欠如していたら、文明を樹立する上で、大きな障害となると考えられる。言語の発達によって、人類は知識、文化、科学、技術を進化させ、

文明を築くことができたのだ。

言語は考えれば考えるほど深い謎のようなものである。言語の起源、働き、変化などについては未だに解明されていない部分がある。このように理路整然と説明できない部分があるからこそ言語は美しい概念として語れる。その魅力にひかれる私が「言語の勉強が苦手だ」と言うのは嘘になる。